

心理テストに関する研究

安 富 利 光

1 文化的社会的要因の変化に伴う 知能水準の発達

知能は本来素質的なものであるとされているが、知能の発達が遺伝的なものばかりでなく環境的な要因によってもかなり影響をうけることは従来の研究結果からも明らかになっているようである。

この研究では、かかる見地から、文化的社会的環境の変化が知能水準の発達にどのように影響しているかをみようとすするものである。すなわち、第二次世界大戦以後の我国の文化的社会的環境がいちじるしい発展的变化をとげていることは誰もが肯定し得るところである。したがって、日常の知的環境も当然その程度が高くなっており、これが全国的な知能水準の発達に影響をもたらしていることが考えられる。そこで知能検査によって測定された結果にもとづいて、この点の検討を行なおうとするものである。

検討のために用いられた資料は、新制田中A式知能検査第1形式および新制田中B式知能検査第1形式の標準化時のものである。この二つの検査はいずれも、昭和24年に標準化を行ない昭和33年に標準化の改訂を行なったものであるしたがって、ここでは昭和24年から33年までの9年間に我国の全国的知能水準がどの程度に発達変化したかをみようとすするものである。

1.1 新制田中A式知能検査の結果

まず、新制田中A式知能検査第1形式の結果についてみる。

1.1.1 知能点

各年令ごとに2回の標準化時の知能点平均および標準偏差をみると第1表のようになる。

第1表 新制田中A式知能検査第1形式知能点平均(M)および標準偏差(SD)

年令	昭和24年		昭和33年	
	M	SD	M	SD
9	22.7	6.8	29.5	6.9
10	27.8	7.7	35.6	7.9
11	32.6	8.6	41.7	8.9
12	36.8	9.4	47.7	9.8
13	40.7	10.2	53.2	10.8
14	44.2	10.9	58.2	11.7
15	47.1	11.4	62.4	12.6
16	49.0	11.8	65.7	13.2
17	50.0	12.0	68.4	13.8
18	50.2	12.0	70.7	14.3

各年令級の平均点はいずれも2回の間かなりの差が認められ年令が上昇するにつれてその程度がより大きくなっているようである。また標準偏差についてみると、各年令とも大きくなっており、平均点の上昇に伴い、個人差が大きくなっていることがうかがえる。さて、平均点の上昇の程度をより具体的に示すために、24年の結果を33年の標準で33年の結果を24年の標準

第2表 比較年度の標準による偏差値の対照表

年令	昭和24年	昭和33年
9	41	61
10	40	60
11	40	61
12	39	62
13	39	62
14	38	63
15	38	63
16	37	64
17	37	65
18	36	67

でそれぞれ偏差値に換算すれば、第2表のようになる。

この表によると、全体を通じて9点ないし17点の偏差値の上昇がみられ、小学校では約10点、中学校では、12、3点、高等学校で15点前後の上昇を示し、年齢が高いほど偏差値の差が大きくなっている傾向がみられる。

1.1.2 下位検査得点

9, 11, 13, 15および17才の各年齢級について下位検査の得点平均についてその変化の状態をみると、つぎのようになる。

第3表 新制田中A式知能検査第1形式下位検査得点平均

検査 年齢	1		2		3		4		5		6		7	
	24年	33年	24年	33年	24年	33年	24年	33年	24年	33年	24年	33年	24年	33年
9	6.7	6.8	2.8	3.4	11.5	14.7	5.5	8.4	49.9	54.8	28.4	28.3	3.0	3.1
11	7.7	10.2	4.1	5.3	14.5	19.8	7.6	12.1	59.7	61.8	35.9	38.3	3.6	4.8
13	10.6	13.2	5.8	6.9	18.8	24.8	10.4	15.6	73.1	83.7	43.2	49.9	4.5	6.0
15	12.8	15.4	7.0	8.1	22.9	29.0	13.9	18.9	81.8	97.6	49.6	57.2	5.2	7.0
17	17.4	17.2	8.3	9.2	27.6	31.8	16.9	21.4	90.7	104.5	58.5	60.4	6.3	7.9

中学校でより大きな値になっている。

検査7（推理）検査2と同様の傾向である。

以上、各下位検査において、得点平均の上昇傾向がかなりみられるのである。

1.2 新制田中B式知能検査の結果

つぎに、新制田中B式知能検査第1形式の結果についてみる。この検査は昭和33年の標準化改訂において、検査1および3の制限時間を2分30秒から2分に改めてあるので、厳密な比較

第4表 新制田中B式知能検査第1形式知能点平均(M)および標準偏差(SD)

年齢	昭和24年		昭和33年	
	M	SD	M	SD
8	30.5	7.4	33.0	7.1
9	35.2	8.1	39.3	7.6
10	41.0	9.1	45.7	8.2
11	47.8	10.3	52.0	8.7
12	53.7	11.0	58.3	9.2
13	58.3	11.2	64.2	9.7
14	61.5	11.3	69.3	10.1
15	64.2	11.4	72.7	10.5
16	65.8	11.5	75.0	10.9
17	66.8	11.5	77.0	11.2
18	67.2	11.6	78.5	11.4

検査1（文章完成）小・中学校では上昇傾向がみられるが、高校ではほとんど差がみられない。

検査2（命令）全体を通じて上昇傾向がみられる。

検査3（反対）、検査4（類推）はいずれも検査2と同様の傾向を示している。

検査5（置換）全体として上昇傾向にあるが小学校に比して、中学・高校の方がより大きな値を示している。

検査6（数字弁別）やはり上昇傾向を示すが

は困難であるが、おおよその傾向はつかめるであろう。

1.2.1 知能点

各年齢ごとに2回の標準化時の知能点平均および標準偏差をみると、第4表のようになる。

ここでもA式の場合と同様に知能点の上昇傾向がみられる。しかし、標準偏差は全体として33年の方がやや小さくなっている。これは一部検査時間の短縮による影響と考えられる。また前と同様の手続により、各年齢の平均知能点を偏差値に換算すれば第5表のようになる。

第5表 比較年度の標準による偏差値対照表

年齢	昭和24年	昭和33年
8	47	53
9	44	55
10	44	55
11	45	54
12	45	54
13	44	55
14	43	57
15	42	58
16	42	58
17	41	59
18	40	60

全体として、3点ないし10点の偏差値のズレがみられA式の場合よりもズレの程度は小さくなっている。これも検査時間の短縮による影響があるものと考えられるが、時間短縮による偏差値の動きは3、4点と推定されるので、この値を見込んでもA式よりはるかに偏差値の上昇度は小さいといえる。

1.2.2 下位検査得点

A式で選んだものと同じ年令級について、下

位検査得点の平均を示すと第6表のようになる

検査1（迷路）ほとんど差がみられない。しかし、33年の改訂において検査時間が短縮されているので、これを考慮に入れば、24年よりも上昇していることが考えられる。

検査2（立方体分析）ほとんど差がみられない。9、11才級でむしろ若干低い値を示している。

第6表 新制田中B式知能検査第1形式下位検査得点平均

検査 年令	1		2		3		4		5		6		7	
	24年	33年	24年	33年	24年	33年	24年	33年	24年	33年	24年	33年	24年	33年
9	6.8	6.2	4.9	4.6	7.4	6.1	44.5	61.8	13.2	15.8	4.3	6.2	18.6	20.6
11	8.9	8.8	7.1	6.8	9.4	7.7	64.6	77.8	19.5	20.7	7.4	7.7	30.3	31.5
13	10.3	10.7	8.0	8.6	10.6	8.9	83.0	93.8	23.1	26.7	7.9	9.7	38.7	41.5
15	10.7	12.1	8.6	9.8	10.8	9.6	89.9	106.4	25.1	30.8	8.3	11.0	44.1	49.2
17	12.7	12.8	10.7	10.7	12.6	10.1	103.0	113.2	31.9	33.8	11.5	11.8	59.6	53.9

検査3（幾何学的図形構成）全体として下降傾向を示している。しかし、検査1と同様に時間が短縮されているので、これを見込めばほとんど差がないと考えられる。

検査4（置換）、検査5（異同弁別）、検査6（数系列完成）はいずれも、全体的に上昇傾向を示している。

検査7（図形抹消）ほとんど差がみられない高校では下降傾向さえみられる。

以上に、A式知能検査とB式知能検査の二つについて、昭和24年から昭和33年までの間に我国の知能水準がどのように変化しているかをみてきたが、これらを要約するとつぎのようになる。

1.3 まとめ

(1) 知能点についてみると、A式ではかなりの上昇がみられるが、これに比較してB式では上昇の程度が小さいようである。

(2) この傾向をより具体的にするために、比較年度の標準により知能点を偏差値に換算すると、A式では平均して13点くらいの上昇がみられるのに、B式では平均7点程度にすぎない。B式の検査時間の短縮を考慮に入れても10点前

後と推定される。

(3) また、知能点の標準偏差も全体的にやや大きくなる傾向を示しており、知能水準が高くなるとともに個人差も大きくなることが知られる。

(4) 下位検査得点については、A式では一般に平均値の上昇がみられるが、B式の方では七つの下位検査のうち、過半数が得点平均の上昇を示していない。

このようにみえてくると、我国の知能水準が第二次世界大戦後の数年間において上昇していることは明らかのものである。

その傾向が、B式よりもA式知能検査の上により強くあらわれているということは、知能測定用具の面からみると、A式では知的環境の影響によって変化している知能の側面をより多くとらえ、B式ではそのような影響の少ない面をとらえていると考えられる。

2 知能検査の練習効果について

一定の作業を同一個人がくりかえして行なえば、ある程度成績が向上することは一般的にいえることである。どのような知能検査でも、比

較的に練習効果の少ないように、問題の選択について注意が払われているが、過去における経験の効果を全く無視することは出来ないのである。

そこで、同一の知能検査をどのくらいの期間をおいて実施すれば、経験のいかんにかかわらず、結果を平等に解釈できるか、またどの程度の期間においては、どのくらいの効果が持続されるか、それがまた経験の回数とどのような関係があるかなどの問題が考えられる。以下にこれらの問題についての検討をこころみる。

小学校4年生、男子46名、女子42名、合計88名を被験者として、新制田中B式知能検査第2形式（下位検査の構成は第1形式と同様）を用いて、2カ月間隔で9回くりかえして実施した結果について考察を行なう。

第1回目の検査成績に基づいて、上位群（成績上位のもの3分の1）、下位群（成績下位のもの3分の1）に分類して考察する。

まず、偏差値によって各回の成績を比較してみると第7表のようになる。

第7表 各回の知能偏差値平均

回数 群別	1	2	3	4	5	6	7	8	9
上位群	62	67	70	73	77	77	80	81	82
下位群	41	50	56	57	64	63	66	68	70
全体	51	58	63	65	69	70	72	74	75

全体としては、ほぼ直線的な成績の上昇がみられるが、6回目ごろに停滞がみられ、その後また上昇を示している。しかしここでは前半よりもその程度が低くなっているようである。また上位群、下位群を比較してみると、成績の上昇傾向は大体にているが、上昇率は上位群よりも下位群の方が高くなっており、知能の高いものは初めから自己の能力を発揮するが、知能の低いものはそうでなく、練習の効果がより大きくなっていることが推測される。

つぎに、下位検査の傾向についてみると、各回の下位検査得点の平均は、第8表のようになる。大部分の下位検査で、実施の初めの方での得点の増加は比較的大であるが、その増加量は次第に小さくなっていくようにみられる。ただ検査2だけは初めの増加量よりも、終りの増加

量の方が大になっている。これはそれぞれの作業の質的な差異によるものであろう。

第8表 各回の下位検査得点平均

検査 群	回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	上	9.9	11.0	11.5	12.2	12.9	12.9	13.6	13.6	14.0
	下	6.6	8.7	9.4	10.3	10.8	11.2	11.8	12.1	12.2
	全	8.3	9.7	10.5	11.0	12.0	12.0	12.7	12.8	13.2
2	上	10.3	10.6	10.1	11.2	11.8	12.1	12.1	12.6	13.2
	下	8.2	8.7	9.0	9.7	10.4	10.0	10.4	11.1	11.3
	全	9.4	9.6	9.8	10.3	10.9	11.1	11.3	11.7	12.6
3	上	11.2	11.7	12.7	11.8	14.4	14.5	15.1	15.3	15.3
	下	7.7	9.0	9.6	9.8	11.2	11.8	12.4	13.4	12.6
	全	9.3	10.3	11.1	11.3	12.6	13.2	13.8	14.1	13.8
4	上	39.8	45.5	51.8	55.1	61.3	61.1	63.0	65.8	68.4
	下	24.8	31.7	36.5	40.3	43.5	46.8	52.7	55.8	57.2
	全	31.7	38.8	43.9	47.6	52.1	54.2	57.8	60.7	62.7
5	上	18.8	20.6	22.6	23.6	25.0	25.2	25.7	27.7	27.6
	下	13.7	17.2	19.3	19.8	21.6	23.3	24.3	25.4	24.1
	全	15.9	18.5	20.5	21.3	22.6	23.7	24.9	26.2	25.8
6	上	12.4	13.3	15.0	14.9	15.9	16.0	16.7	16.3	17.0
	下	6.0	8.6	9.1	9.7	11.1	11.1	11.3	12.1	13.1
	全	9.2	10.8	11.9	12.3	13.4	13.8	14.1	14.5	15.2
7	上	17.9	21.4	23.3	25.5	28.1	30.9	31.0	34.7	36.5
	下	10.8	14.0	18.4	19.0	21.8	22.8	25.2	29.1	23.3
	全	14.1	17.6	20.4	22.2	25.0	26.9	29.0	32.3	32.4

第9表 下位検査得点発達指数

検査 群	回数	2	3	4	5	6	7	8	9
1	上	112	116	123	130	130	137	137	142
	下	132	142	156	164	170	179	183	185
	全	117	126	133	145	145	154	154	159
2	上	103	99	109	115	117	120	123	129
	下	107	110	118	128	122	128	136	141
	全	102	104	110	116	118	120	124	133
3	上	104	114	105	128	130	135	136	137
	下	117	124	128	146	153	161	174	164
	全	111	120	123	136	143	149	152	149
4	上	114	130	139	154	154	158	166	172
	下	127	147	162	176	189	212	225	230
	全	122	139	156	164	171	183	192	198
5	上	109	120	152	133	134	137	147	147
	下	125	141	145	158	170	177	185	176
	全	116	129	133	142	149	157	164	162

6	上	108	121	120	128	129	135	132	138
	下	143	152	162	185	185	188	202	218
	全	118	130	134	147	150	154	159	166
7	上	120	131	143	157	173	174	194	204
	下	130	170	176	202	211	233	269	262
	全	124	144	157	177	191	205	229	229

上位群，下位群を比較すれば偏差値でみたものと同じような傾向がより顕著にあらわれている。なお，各検査の第1回目の得点平均を100として，他の回の値を指数で示せば，第9表のようになる。これによると，置換作業(検査4)抹消(検査7)などの比較的単純な作業では得点の上昇率が極めて高いのに対して，立方体の分析(検査2)，数系列完成(検査6)などは上昇率が低くなっている。すなわち，作業の質的な差異により練習効果のあり方を異にするようである。

各回の検査得点の差をt検定によって調べたところ，5%以下の危険率で有意差のあったものを示すと第10表のようになる。(○印は有意差あり，×印は有意差なし)

これによると，検査2，3，6は各回の間に有意な上昇がほとんどみられない。検査1は比較的各回とも有意な上昇をみせている。検査4，5，7は前半において有意な上昇を示すが，後半では有意差がみられない。

第10表 各回の得点平均の差の検定

検査	回	1~2	2~3	3~4	4~5	5~6	6~7	7~8	8~9
1		○	○	○	○	×	○	○	×
2		×	×	×	×	×	×	×	○
3		○	×	×	○	×	×	×	×
4		○	○	×	○	×	×	×	×
5		○	○	×	○	×	×	×	×
6		○	×	×	×	×	×	×	×
7		○	○	×	○	×	×	○	×

第11表 各回の相関関係(知能点)

回	1~2	2~3	3~4	4~5	5~6	6~7	7~8	8~9
r	0.84	0.87	0.86	0.79	0.86	0.89	0.76	0.90

全体を通じて，実験の回数を重ねるにつれて上昇の程度が少なくなっているといえる。したがって，練習効果は最初の3回くらいまでがも

っとも大きいようである。

最後に，各回ごとの成績の相関関係をみると知能点による相関係数は第11表のようになる。これによると，おおよそ0.8~0.9の値をとり相関関係としてはかなり高いものといえる。このことから，練習効果の現われにもかわらず検査成績の順位に動揺の少ないことが推定され検査が極めて信頼されることを示している。

以上を要約すると，

- (1) 2カ月の期間において，検査をくり返し実施した場合，かなりの練習効果がみられる。
- (2) 知能の高いものよりも，低いものの方が練習効果の程度が大である
- (3) 単純作業ほど練習効果が大きい傾向がみられる。
- (4) 各回ごとの成績の相関関係はかなり高く検査の信頼性の高さがみられる。

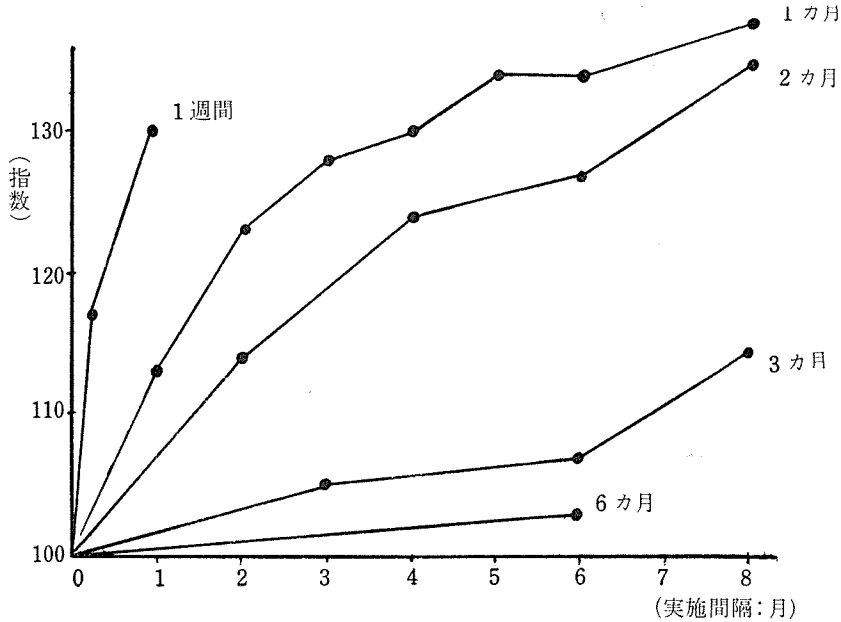
これらが，この度びの実験結果の大要であるが，つぎに従来の研究結果と総合して考察を試みる。すなわち，鈴木清らが，1週間の期間において5回くりかえし実験を行ない，その後さらに，1カ月，3カ月，6カ月の期間で追試^(註1)が行なわれている。そこで1週間，1カ月，2カ月，3カ月，6カ月の5つの方法による実験の結果を比較検討してみる。

いま，おのおのの方法における第1回目の成績を100とし2回目以降の成績を指数で示せば第1図のようになる。これによると，一定の期間内では経験の回数が多いほど，練習効果が大きくなっているようである。また，1週間~2カ月くらいの期間では，経験の回数が同じならば，練習効果も同程度になる傾向がみられる。3カ月以上ではかなり効果が小さくなっているそして，6カ月ではほとんど効果がみられなくなっている。

したがって，2カ月以内の期間において検査をくりかえした場合には，練習効果のあらわれ方は経験の間隔にはあまり関係がなく，その回数に関係があるようである。

以上のことから，知能検査の場合には6カ月以上の期間をおけば，同じ検査をくりかえして実施しても練習効果による成績の変動はあまりないものと考えられるのである。

第1図 偏差値増加指数曲線



3 興味 の 発 達

興味は年齢の増加あるいは心身の発達とともに変化することが考えられるが、ここでは興味検査にあらわれた結果にもとづいて、心身の発達ともなう興味の変化の過程を検討するものである。

用いた資料は、田研式職業興味検査の標準化時のものである。被験者は中学、高校、大学、工場の4分野にわたり男女別人数はつぎの通りである。

	男 子	女 子	合 計
中 学	67	69	136
高 校	622	278	900
大 学	376	58	434
工 場	106	99	205
全 体	1,171	504	1,675

検査の結果は、戸外、機械、計算、科学、説得、美術、文芸、音楽、奉仕、書記などの分野についてその興味の程度を偏差値によって示すようになっている。

そこで、所属別男女別に各興味分野の得点平均および標準偏差を算出すると第12表のように

なる。これによって、以下に各興味分野の得点の変化の傾向を検討する。

(戸 外)

男子では各所属の得点平均にはあまり変化はみられないが、得点分布をみると工場のみが他に比してやや左寄りの傾向になっている。女子においても平均にはあまり変わりはないが、分布はやはり工場が左寄りの傾向である。すなわち男女を通じて戸外に対する興味は職場に入ると低くなる人が多いようである。

(機 械)

男子では大学の平均が一番低くなっている。また、中学の標準偏差は他に比してやや小さいといえる。分布は高校がもっとも右寄りである。中学ではいわゆる正規型分布をなさない。女子では平均にも変化はなく、分布もおおよそ一致している。すなわち、機械に対する興味は、中学校では個人差が少ないが年齢が進むと大きくなるようである。また、男女差がはっきりと認められ男子のほうが女子よりも高い興味を示している。

(計 算)

男子では大学の平均がやや低い。分布はおおよそ一致しているが、大学が左寄りである。女

子ども大学の平均は低い分布にはあまり差異はない。すなわち、計算に対する興味は男女ともに大学で低くなるようである。

第12表 興味分野別得点平均 (M) および標準偏差 (SD)

		中 学	高 校	大 学	工 場
戸	男	M 23.0 SD 7.1	23.9 7.8	23.5 8.3	21.8 7.9
	女	M 21.2 SD 5.4	19.1 6.9	22.0 6.6	18.0 6.8
機	男	M 33.7 SD 8.7	35.0 10.1	26.8 11.3	1.71 11.8
	女	M 18.7 SD 7.2	17.0 7.8	19.8 8.4	18.1 7.9
計	男	M 15.0 SD 5.9	14.5 5.9	11.9 5.8	14.8 6.1
	女	M 15.3 SD 5.9	16.6 6.3	12.7 5.6	15.9 5.6
科	男	M 23.9 SD 7.3	24.6 7.6	20.8 9.1	3.3 8.2
	女	M 15.3 SD 6.1	15.4 7.5	19.3 7.9	17.2 7.4
説	男	M 20.8 SD 8.2	18.6 7.9	20.9 9.4	19.6 8.7
	女	M 23.7 SD 7.0	22.4 8.9	15.6 7.9	21.2 8.8
美	男	M 17.8 SD 7.7	17.8 8.0	21.1 8.6	19.4 8.4
	女	M 22.4 SD 7.5	23.0 8.9	26.5 9.3	22.7 9.9
文	男	M 14.6 SD 4.5	13.6 6.5	18.9 8.1	16.8 7.4
	女	M 16.9 SD 6.5	17.7 7.0	21.7 5.7	18.9 6.8
音	男	M 7.5 SD 5.6	10.0 6.2	14.2 6.0	12.4 6.5
	女	M 14.9 SD 6.7	17.0 5.9	13.5 6.6	17.0 5.9
奉	男	M 16.7 SD 5.4	17.1 6.4	19.6 7.8	19.7 6.4
	女	M 23.5 SD 7.3	22.5 7.1	21.7 7.3	22.1 7.5

書	男	M 30.1 SD 9.3	28.7 10.9	27.6 11.0	30.2 10.3
	女	M 32.4 SD 8.8	37.4 10.9	27.4 8.8	35.0 10.3

(科 学)

男子では大学の平均が一番低く分布も左寄りであるが、女子では平均は男子と反対に一番高くなっている。分布には差異はみられない。すなわち科学に対する興味は男子と女子で大学の頃に逆の傾向になっている。全体として男女差が認められ女子の方が低いようである。

(説 得)

男子では平均にほとんど差がみられない。分布も大体一致している。これに対して女子では大学の平均が低くなっており、中学の平均が比較的高くなっている。したがって分布も中学校が右寄りになり、大学が左寄りになり、高校および工場はその中間にある。すなわち、説得に対する興味は中学、高校、大学と進むにつれ次第にうすれていくようにみられる。ただし、職場における興味は大学よりも高いといえる。このような傾向は女子においてつよく、男子ではあまり発達的变化はみられない。

(美 術)

男子では平均は大学がもっとも高くなっている。分布は大体一致しているがやや大学が右寄りになっている。女子でも男子と同じような傾向をみせている。すなわち、美術に対する興味は、中学、高校時代を経て大学に入ってから高まるようである。工場でも高くなっているが大学ほどではない。男女差がはっきりとみられ、女子の方が高い興味を示しているようである。

(文 芸)

男子、女子ともに平均は大学が高くなっている。また、分布は中学、高校ではあまり変りはないが、大学、工場ではやや右寄りになっている。すなわち、文芸に対する興味は男子の場合中学、高校に比して大学が高い。しかも、中学では個人差が小さいが大学ではかなりの個人差がみられる。女子では個人差の変動はみられないが、年齢にともない次第に興味が高くなっていく傾向がみられる。男女差がみられ女子の方が高い興味を示している。

(音 楽)

男子では、中学の平均がかなり低く、高校、工場、大学の順に高くなっていく。分布は中学が左寄りであり、大学、工場は大体一致し、高校は両者の中間にある。女子では高校および工場が高くなっている。分布もこの両者が右寄りである。すなわち、音楽に対する興味は男子では大学でもっとも高まるのに対して、女子では高校で高くなり大学では低くなっている。もちろん男女差がみられ、女子の方が高い興味を示している。

(奉 仕)

男子では、大学、工場が比較的高い平均を示している。分布はおおよそ一致しているが、中学、高校と大学、工場がややななれている。女子では平均にあまり差異はない。分布もほとんど一致している。すなわち、奉仕に対する興味は、男子では大学、工場の段階になって高まることが見られるが、女子では年令的な変化はあまりないようである。男女差がみられ女子の方が高い興味を示している。

(書 記)

男子では平均にあまり変化はみられない。分布も大体一致している。女子では大学で低い平均を示している。分布は大体一致しているが大

学でやや左寄りである。すなわち、書記に対する興味は、男子の場合中学から大学にかけて低くなっていくようである。女子では高校において興味の高まりがみられる。

以上に各興味分野について、心身の発達にともなう興味の変化の様相をみたのであるが、全体としての傾向をみると、美術、音楽、奉仕、などの分野では年令の上昇にしたがい、次第に興味が増してくるようである。また、女子にのみみられる傾向であるが、説得の分野では年令の上昇にしたがい興味が低くなっていくようである。

ここに用いた資料は、被験者の内容からみれば十分なものとはいえないので、これらの結果から結論を導き出すことは危険であるが、一つの傾向としてみるならば参考に供し得るであろう。

注1 鈴木清「田中式知能検査の練習効果について」
教育心理の諸問題 P 318~321 昭和27年

注2 鈴木清「テスト成績に影響を及ぼす諸条件」
教育心理 3巻5号 P22~25 昭和30年